束の間

栗山政子

時止まる片蔭の濃きひとところ
昼顔の咲き放題や海遠し
波音を貝風鈴が掻き回す
真昼間の闇を吸ひたる凌霄花
人声の途切れ途切れや盆の月
送り火のうすむらさきの中に人
再会はほんの束の間いわし雲
手より落として秋草に浮く栞
水澄むや膝に真白き握り飯
そこだけが秋めいてゐる御神木